

台風 19 号の影響によりお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げ、皆様が早く平穏な生活に戻ることを心よりお祈り申し上げます。

日本陸水学会第 17 代会長候補者抱負

中野伸一

私は、2018 年より第 16 代日本陸水学会会長を務めさせていただき、2018 年の伴修平幹事長の事務局および今年発足の村上哲生幹事長の事務局と共に、2 年間にわたって日本陸水学会を運営させていただいております。この間、会員数減少に伴う会費収入の漸減傾向はあるものの、前幹事会による繰越金蓄積の発見や過去の大会実行委員会による寄付をいただきました。また、2021 年度からの 5 年間については、シュプリンガーが英文誌の出版費用を極めて低く抑えてくれました。これらにより、我々の学会の財政はすでに好転しております。我々は、この状況を無為無策に過ごすのではなく、学会員へのサービスや利便性の向上を図ると共に、新たな取り組みを行うなどして、学会の活性化および会員数の増加を図らねばなりません。

日本陸水学会は、2011 年から 2012 年の一年間、将来計画委員会を設置しました。この委員会は、今後 20~30 年間程度の将来構想の概略を議論し、2012 年に報告書を具申しました（藤井ら、2012）。この報告書は大変優れたものであり、そこで指摘・提案されている内容は、当時からすでに 7 年を経過してもなお、現在の我々の学会の運営改善に資する内容を含んでいます。私は、このように優れた提案があるならば、まずはこれをベースに我々の学会の運営改善を図るのが良いと考えています。この報告書の提案の中には、常設の大会プログラム編成委員会（第 85 回の東京大会に向けてメンバーを編成中）や、大会期間中の託児サービスの紹介など、すでに動いている項目もあります。我々は、この報告書で提案されている項目について、現在の我々の状況に応じて改訂を加えながら、学会の運営改善を進めなければなりません。陸水学会の幹事会では現在、財政シミュレーションを行っており、学会がいくつかの取り組みを行う場合、それらを持続的に行うことができるか検討を進めています。

先日行われた金沢大会の総会において、会員から「現在の陸水学会は、どの方向を目指しているのか分からない」とのコメントをいただきました。私は、日本陸水学会が目指すべき方向性は以下の 2 つであろうと考えます：

### **I. 若い次世代の方々が夢と希望と刺激を得られる学会**

### **II. 社会に開かれ協働する学会**

方向性が複数あると混乱されるかもしれません。しかし、日本陸水学会は元来、学際的でありかつ現代社会に直面する課題に取り組んできた学会です。また、現在、我々は

研究や教育だけでなく、社会貢献も求められております。このため、これら2つの方向性は、我々の学会の目指すものとして相応しいと、私は考えます。

本稿では、もし私が引き続き2年間、日本陸水学会の会長を務めさせていただけるなら、上記の目指す方向性を実現するためにどのような施策を進めたいかについて、先述の将来計画委員会による報告を元に私見を述べさせていただきます。以下に述べる施策は、先述のシミュレーションに基づき、企画委員会をはじめとする関係委員会等と共に検討を行ってまいります。

1. **多様性に富み刺激のある魅力的な大会にするために：**先述の2012年の将来計画委員会による報告書（藤井ら、2012）では、おおまかに以下の点が大会を盛り上げるために必要とされています：大会プログラム編成委員会の設置、若手研究者が企画するシンポジウム／課題講演、セッション（課題講演に類するもの）中心のプログラム編成、学際交流の推進。私は、当該報告書で提案されている内容に基づいて、以下の4点を進めたいと考えています。

- ① シンポジウムや課題講演における国内外からの講演者招聘への支援
- ② 学際的領域の開拓
- ③ 応用陸水学的な発表の充実
- ④ 自治体研究者、小・中・高等学校等教員、企業研究者、アマチュア研究者などの皆様が参加し易い大会運営と雰囲気創り

①については、私自身が若い頃そうであったのですが、大会に参加する大きな目的は、自分が目標としているスター研究者に会うためでした。私は、若手研究者の皆様には是非、課題講演などの企画を立てていただき、そしてそれらの企画に上記のスター研究者を含む国内外の関連研究者による招待講演を入れていただきたいと思います（学会員／非学会員を問いません）。外国人を招聘するのであれば、当該セッションは英語で行うことも良いでしょう。私は、これらの講演者招聘に必要な経費について、学会からのご支援を差し上げたいと考えています。

②について。近年、トランスディシプリナリー研究に代表される学際研究の重要性が注目されています。我々の学会の大会においても、ほぼ毎回、森・川・海（湖沼）のつながり研究など、学際的領域研究のセッションが行われています。私は、日本陸水学会が学際領域研究を主導する役割を担うにはどうすべきか、他学会の動向なども含めて検討を進めます。

③について。陸水学は、基礎学問的要素が強い一方、先述の通り、実際の社会・環境問題にも直接対応する極めて現代的な課題に取り組んでいます。私は、企業の皆様による実践的な応用陸水学の発表を強く奨励します。

④については、私が大学院生の時代、陸水学会大会には自治体研究者、小・中・

高等学校等教員、企業研究者、アマチュア研究者の皆様も多くご参加されてきました。しかし現在、これらの皆様によるご参加は、以前より少なくなっています。私は、これらの皆様がどのような大会日程・プログラム・大会開催場所であれば参加し易いか、どのような企画があれば参加のモチベーションが上がるかについても、検討します。また、このことは下の「4. 学会のアウトリーチ活動」についても関連します。

2. **学会の国際化**：日本陸水学会は、すでに河川湖沼国際シンポジウム（**International Symposium on River and Lake Environment, ISRLE**）を公式行事として位置づけています。ISRLE は、日本、韓国、中国の陸水学会が2年に一度、各国持ち回りで開催している国際会議です。大変ありがたいことに、ISRLE に関わる日韓中の陸水学者間の交流と関係は極めて活発かつ良好です。私は、日本陸水学会からより多くの皆様が ISRLE にご参加いただけるよう、環境を醸成したいと考えています。

また私は、外国人研究者にも日本陸水学会会員になっていただき、日本人と共に陸水学を盛り上げていただけないかと考えています。つまり、会員数増加を日本人のみで考えるのではなく、外国人研究者も含めて会員数増を図ってはどうか？ということですが。私は、これを実現するために、ISRLE だけでなく、沖縄大会以降継続的に開催されている **Internationalizing limnology** セッションを維持・発展させたいと考えています。すなわち、たとえこのセッションのみの参加であっても良いので、外国人研究者も参加し易くかつ陸水学を楽しんでいただける場を提供したく考えています。もちろん、このセッションで日本人研究者が英語で発表しても良いし、企業研究者が自社で開発した機器やシステムの研究成果について英語で発表をしても良いのです。

3. **陸水学雑誌と英文誌 *Limnology***：本来、学会誌の編集は編集委員会が責任を持ち、学会長は学会誌の編集に口出しすることはできるだけ避けるべきと、私は考えます。しかし、これら2つの学会誌は、我々が誇りとする学会の重要な「顔」です。我々の雑誌において、今どのようなトピックが話題となっているか、雑誌の国内的・国際的位置や役割はどうか、論文投稿者がタイムリーに情報を得る仕組みをどうすれば良いか、より多くの投稿論文が集まるためにはどうすれば良いか等について、編集委員会と共に考えます。
4. **学会のアウトリーチ活動**：正直申しまして、「陸水学」という語は社会的に広く認知されているとは言えない状況です。このことは、英語である「**Limnology**」ですら同じ状況です。これらは、我々が自らの学問のすそ野を広げる努力をあまり行ってこなかったからかもしれません。私は、大学や研究所だけでなく、自治体、学校、

企業、NPOやNGOなどの広い範囲や立場のみなさまが、陸水学会の大会を活動の発表の場としてご利用されることを考えています。このことにより、陸水学・Limnologyに関わる方々の範囲を広げ、そのことがすそ野の拡大につながると考えています。

日本陸水学会は、たとえ学会規模は大きくなくても、国際的に高いレベルの学術情報が得られ、国内外の多くの共同研究を産み出し、次々と若い世代が育つ基盤となる学会です。私は、日本陸水学会がそのような場で在り続けるよう、環境と雰囲気創りに邁進いたします。もちろん、我々の学会にはまだまだ多くの課題があるでしょう。それらについて、決して拙速にならず、企画委員会、編集委員会、評議員会とも多く議論して、幹事会と共にあくまで是々非々で対応させていただきます。

以上、私がここで述べていることが正鵠を射ていることを祈ります。我々の学会は、1931年に設立された、環境科学関係では我が国でも特に長い歴史と高い実績を持つ学会です。私は、日本陸水学会の学術的かつ社会的重要性に強い誇りを持っております。皆様の貴重なご理解、ご支援、ご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

**追伸：みなさま、誰を支持する場合であれ、ちゃんと投票しましょうね！**

<引用文献>

藤井智康・飯泉佳子・石川俊之・石田典子・風間ふたば・鎌内宏光・関野樹・古里栄一・丸山敦（2012）陸水学会の将来的な会員増加に関する提言（副題）-2031年に学会100周年を迎えるために-、日本陸水学会将来計画委員会

<http://www.jslim.jp/wp-content/uploads/2018/03/b7050c142eb8a9b341aaa20d9f993b83-1.pdf>

2019年10月

中野伸一

京大大学生態学研究センター